首 両唫

太老
都雄

里近う来る声くれしほとゝきす
ねころひ所にはやさき卯の花
屋けのあれ尾白五枚ほしかくて
とあるの留守を頼なきまゐり
我しらぬ所のれの多き月によひ
みとりしくあれし駒のいなゝやう
本からあゆく限く行きふ萬とみち
石焼竈のゝ華くみよもむ
ねきつゝおとよそ色めならせて
行ゆきとゝすそて出来の子まくち
鴨のもとむしふれとけ風くちり
ふるかるまくるて行かふあれ家
気乃行のぬ二十五日の行れ月
あちこち地乃さかれ山てのけの子稲
秋深く無垂よよ次見郷てら
酒たらしめくみえ不近行き
花の枝人れもつゝとら宗りり
たるふち枝まくあるし木築
忘れぬ行いえれ物の深え在に
辛抱のよれ色えあれなひ
まくれて又行かされる火うち石
けいくあかるき雨乃ほいちう
書る扇とかる扇ところ仕はかく
そつと乃れいくもと深行し足
御あ元ユつ有てとしれ柏餅
とらうと鯉のたく孫あのるふ池
行りうちれく閑静れむかふ老戸
仕事しれたるつ登乃うそめり
月一夜ひとなこ庭りあうかるき
砂かしころけく志れぬ芸妓子
神領のうちにく貢を嵌てらひ
鴬よ乃らふて人のけれるふま
みるなよあるあり行うとあい設示
小判ころてく次御茶の梅見
よく広い庭て一本乃こるなた
夜ちかしよく探みゆまく庭

老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 ヽ 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老 雄 老